

△対談▽ 私と一枚のレコード——ヴィヴァルディのトリオ・ソナタ

中嶋嶺雄／村上陽一郎 (NHK 五世M 一九八七・一〇)

村上 「私と一枚のレコード」、今日は国際関係論、特に現代中国学をご専攻の中嶋嶺雄先生をお迎えしました。こんにちは。

中嶋 こんにちは。

村上 今もご紹介いたしましたように、非常にデリケートな国際問題の専門家として活躍中でいらっしゃるようですが、音楽との出会い、というのはどんなところだったんでしょう？

中嶋 そうですね、子供の頃から音楽は好きだったんですけど、私、松本に生まれ育ったものですから、あの有名な鈴木鎮一さん「現在では「スズキ・メソッド」として世界に知られる鈴木先生が、終戦直後のなにもない時期に松本音楽院を設立されましたね。私自身もどうしてもヴァイオリンを習いたい、ということで、そのいわば第一期生のような形で鈴木鎮一先生のところに入門した、というわけなんです。その松本音楽院でのヴァイオリン教育が今日のいわゆる「スズキ・メソッド」のはしりなんです。

村上 そうなんですか。第一期生、その松本音楽院の最初の生徒だったんですか。

中嶋 はい、そうです。

村上 じゃあきつと、ずいぶんいろんな方が「スズキ・メソッド」からお出になって活躍していらっしゃるから、中嶋さんも専門家におなりになりたい、とお思いになったんじゃないですか。

中嶋 いいえ、そんな水準にはとてもないんですが、むしろ幸いなことに、現在ベルリン国立音楽大学教授として西ドイツで活躍していらっしゃるあの豊田耕児さんが、子供の頃から天才ヴァイオリニストと言われて、鈴木先生のたいへん素晴らしいお弟子として私どもの近くにいましたからね。私たちは「耕ちゃん、耕ちゃん」と呼んで兄事していたんですが、その豊田さんなんかのレッスンや演奏をいつも聞いてましたから、私などはプロの道を志すべきではない、という決断が早くから前提されていたということなんです。

村上 そんなことはないでしょうが、今でもお弾きでいらっしゃるわけですね。

中嶋 はい、時々というか最近は特に忙しいものですから、多忙なだけにかえて昔の心のふるりに回歸するというのか、音楽にもう一度復帰する形で、この頃はよくヴァイオリンを弾いています。

村上 特に室内楽なんかでは、よくステージも経験してらっしゃるようで。

中嶋 たまたま昨年（一九八六年）は非常に幸運というか、サントリーホールで二回弾く機会がありました。ちょうど一年前のオープニングの夜（十月十二日）、私ど

平祐

ものような村の音楽愛好家がステージでちょっと何か話すというプログラムがあったのです。広中<sup>中</sup>安野光雅、桐島洋子といった方たちなのですが、ところが私がヴァイオリンを弾くことが知られていたものですから、「おまえは何か弾け」ということで、東京交響楽団が伴奏してくれるというんで、思い切って弾いたんです。それからもう一回は、さきほどの鈴木鎮一先生の米寿記念の演奏会がサントリーホールで開かれて、松本音楽院の第一期生が集まりましたね、エックレスのヴァイオリン・ソナタ（ト短調）を弾いたんです。

村上  
中嶋  
そうですか、それはずいぶん楽しいだろうと思いますね。  
ええ、是非一度、チェロをお弾きの村上さんともお手あわせさせていただければ  
と思っますけれど。

村上  
中嶋  
いえいえ、こちらこそ。そうすると当然、本日の「私と一枚のレコード」は、ヴァイオリンの曲、ということになりますですか？

村上  
中嶋  
まあそうなのですが、私の何枚かのレコードの中から、ちょっと珍しいものをお持ちしたんです。

村上  
中嶋  
ああ、本当に。ご自分でわざわざ持ってきてくださって有難うございました。珍しいレコードですのでちょっと、中嶋さんご自身で紹介いただきましょうか。そうですね。ヴィヴァルディなんですけどね。ヴィヴァルディの初期の作品の中のいわゆるトリオ・ソナタ、三声部のソナタです。つまり二つのヴァイオリンと通奏低音（バス・コンティニョ）なんですけども、そのためのソナタがありましたしてね。この中から、イ長調の作品一、第九番という曲を持ってまいりました。これは、ヴィヴァルディの初期の作品でも、あの有名な「四季」なんかができる以前の「一七〇五年の曲なんです。ヴィヴァルディにはコンチェルト・グロツソ（合奏協奏曲）の中にいろいろ有名な曲がありますし、「四季」自身もそうなんですけども、それ以前の非常に初期の段階の作品ということで、レコードとして  
もちょっと珍しいものなのです。

村上  
中嶋  
作品一ですか？  
はい。これからおかけするのは作品一の第九番、イ長調のトリオ・ソナタです。このレコードは、実はソ連のレコード（メロディア版）でしてね。演奏する人たちは、全部チャイコフスキー国際コンクールの受賞者で、二つのヴァイオリンとそれから通奏低音ですから、チェロとチェンバロが入るわけですが、第一ヴァイオリンがウラジミール・スピバコフ、第二ヴァイオリンがアナトゥーリ・シェイニエック、それから、チェロがユーリ・トゥロフスキー、チェンバロがセルゲイ・ディジュールという人たちです。非常によくヴィヴァルディの感じをとらえて演奏しています。それからこの作品自身が、ヴィヴァルディの従来の作品の中でも、ちょっと型破りなもので、プレリユードにちょっと「四季」に似たようなパッセ

ージができてきますが、その次に  非常に神秘的な半音階のアダージオがあって、そのあとに、アルマンドとコレンテという  の非常にリズムカルな舞曲を二つ並べちゃうという型式なんです。ゆるやかなのがあり、急なのがあり、またゆるやかなのがあり、急なのがありという形を破っているという点でも珍しい。このレコードは、私の友人でソ連科学アカデミーの東洋学研究所という、アジア学の非常に古い伝統を誇る研究所の中国部長であるシ・デリュエーションさんからいただいたものなのです。私が音楽が好きだということをよく知ってましてね、このレコードを私にプレゼントしてくれた。そういう点でもちょっと印象深い  「一枚のレコード」……

村上

それじゃあ、そのヴィヴァルディのトリオ・ソナタ、二本のヴァイオリンとバス・コンティニオのためのトリオ・ソナタ、作品一の九、プレリユードとアダージオ、アルマンド・アレグロとコレンテ。その四つの楽章を全部聞いてみましょう。

(音楽)

村上

ヴィヴァルディの作品一の九でした。とてもこう、若々しい演奏で。

中嶋

そうですね。これ、ヴィヴァルディが二十七歳の時の作品なんですけど。ヴィヴァルディの曲の中でも非常に自由な、一種の即興性を感じ取られるような気がしますね。今のこの曲の構成自身も、さきほど言いましたように、かなり従来の型を破っていますね。ですから後の「四季」などの原型がここにあるんですけども、私はこの時期の作品が非常に好きで、しかもこの時期の作品はあまりレコードになっていないんですね。私が調べた限りでも、トリオ・ソナタは一、二のレコードがありますけれども、この作品とこのナンバーはない。この作品はイ長調でこの前後の頃は短調の曲が多いんですけども、これは非常に明るい長調の響きが十分に感じられます。それから、この演奏はいかがでした？

村上

そう、とても若々しくて気持ちいい……

中嶋

演奏ですね。日本の聴取者のみなさんは、ヴィヴァルディっていうとイ・ムジカ合奏団をはじめ欧米のバロックの演奏家たちをよくご存じだろうと思いますけれど、こうして現代ソ連の演奏家たちがヴィヴァルディの個性を非常によくつかんで、抑制する所は抑制しながら、実に素直に弾いている感じが、とても好感が持てると思うんです。

それで私、実はさっきヴァイオリンのことをちょっと申し上げましたけど、今日、ヴィヴァルディって言うと、誰も知らない人がないぐらい有名になりましたでしょう。ところが私がヴァイオリンを習い始めた昭和二十年代前半の頃はヴィ

ヴァルディっていてもほとんど誰も知らなかった。私の近くで知ってる人はほとんどなかったんですよ。

村上

そのようですね。

中嶋

小中学校の音楽の教科書によく作曲家の系譜が出ていますよね。それでもヴィヴァルディはでてこないんですよ。バッハ以前は出ていなくて、すぐにヘンデル、ハイドン、モーツァルトとこうなっていたんですね。ヴィヴァルディなんて全然出てこないもんですから誰も知らない。ある意味では、バロックの作曲家中のヴィヴァルディのいわば復興ってのは、ヴィヴァルディ自身がやっぱり一度歴史の中に埋もれた人なので、バッハと同じように今世紀になってからなんですね。しかも、ごく新しいところで復権したんですけど、それが日本で今日のようなブームになったのは、実はこの二、三十年ぐらいじゃないでしょうか。ですからね、ヴァイオリンをやった方は誰でもご承知だと思いますけども、ヴィヴァルディのヴァイオリン協奏曲ですね、特にアー・モール（イ短調）として知られている曲は、ヴィヴァルディの有名な十二の合奏協奏曲の中の作品集「調和の靈感」とよく訳されている、あの「レストロ・アルモニカ」の中の一つなんですけれども、この作品をヴァイオリンやると必ず弾く。まゝ入門段階をちょっと過ぎたぐらいのところ、ヴィヴァルディのコンチェルトにかかるわけですね。いよいよヴァイオリンをまゝ本当にやり始める、その第一段階なんですけど。で、こういう曲を習っていて中学生の時の音楽会なんかで弾いても、当時は誰も知らないんですね、ヴィヴァルディっていう名前自体を。

村上

なるほどねえ。

中嶋

ですから、全然みんなに知られていない作曲家の曲を弾いても、なんとなくこうそぐわないような気がしました。ヴィヴァルディについてはこういうことをよく体験したことがある。ところが今はもうヴィヴァルディっていうと大変なブームで、どこでもヴィヴァルディですから……

村上

日本にもヴィヴァルディ合奏団とか、新ヴィヴァルディ合奏団もありますしね。

中嶋

そう、ですから音楽家、作家家の浮き沈みっていうか、評価って、非常にもしろいんですが、その点でもヴィヴァルディは非常に印象的です。そういう意味では、私はヴィヴァルディの初期の作品こそ、もっと復権してもいいんじゃないかな、と思ってます。

村上

やはりあの、ヴィヴァルディをお弾きになるという立場からは、お考えというかなんぞでらっしゃる曲っていうのは、やっぱりバロックなんですか？ さっき、エックレスの名前もできましたけど。

中嶋

そうですねえ、エックレスもそうなんですけど、やはりバロックはヴァイオリンをやる場合には、どうしても通過しなきゃいけない関門ですし、それからなんと

なく、自分のふる里にもどっていくような感じがありますね。もちろんモーツァルトも大好きですし、それからプロコフィエフやコダーイを私は実はかなり好きなんですけど、しかしながら、やっぱり自分が演奏するとなると、演奏技術のこともありますので、やっぱりヴィヴァルディ、バッハ、ハイドンをあたりが一番無難ですし、私にはとくにヴィヴァルディがいいんですね。

ただヴィヴァルディは、専門家の間でもいろいろに言われてきた。なんだヴィヴァルディってのは、いつも同じような曲の変奏曲の集合にすぎないじゃないかと、かなり悪口を言う人もいますよね。同じイタリアのあの当時の作曲家でも、同じバロックでも、アルビノーニなんかのほうがはるかに音楽的に優れているって言うような人がいるんですが、しかしながら、あの時代を考えてみますとねえ、ヴィヴァルディは、当時はヴェネチアのピエタ女子養育院のヴァイオリンの教師でもあったのですが、とにかくいろいろな注文がくるのを、次から次に引き受けてどんどん作曲していったわけでしょう。で、そういう意味ではまさに職人芸、プロなんです。音楽家、芸術家というよりは職業作曲家なんです。ですからある種の機動性とそれから量っていうものが、ヴィヴァルディの大きな特徴でもあるんですね。その中から今おかけしたような、やっぱり美しい作品を残していた、というところにヴィヴァルディらしさというか、僕のわがヴィヴァルディ・礼讃っていうか、ヴィヴァルディ讃歌があるわけで……

村上

中嶋

そうですね、やはりヴィヴァルディってのは、現在もう非常なブームになっていますけども、もう一遍、その真髄が語られていいんじゃないか、という感じがします。

村上

たしかに、日本でヴィヴァルディがブームになったのは、やっぱりその先程から話題にでてる「四季」というのがあまりにもね。

中嶋

そう、そうですね。「四季」だけがね。ポピュラーになりすぎてね。

村上

あまりにも有名になっちゃった、という感じですね。「四季」は本当はあのコンチェルト・グロッソの中の一つの部門、部分でしかないわけで、ヴィヴァルディは本当にたくさんいろいろの協奏曲を作ってますから、もっと全体像が浮き彫りされていいんじゃないかな、って気がします。

村上

そうすると、あの、ご自分でもずいぶん今お弾きになってらっしゃいますか？ ヴィヴァルディを……

中嶋

そうですね。ヴィヴァルディも弾いてますけどね、最近ちょっと別の曲を練習しています。近く私どもの大学で私が実行委員長になって「地域研究と社会諸科学」という国際シンポジウムがあるものですから、外国からお客さんがたくさん

来ますんで、ホームパーティーをやる時に、ハイドンのピアノ・トリオをやるうっていうんで、例のあの、ピーターズ・エディションの第一巻ナンバー・ワンのピアノ・トリオ（ト長調）です。これ<sup>れ</sup>は、割合に合わせやすいものですから、一度村上さんともぜひ合奏していただけるといいのですが……

村上 こちらこそ。ただそうすると、例えばね、外国の学会なんかにもずいぶんお出になつてらっしゃると思います、そういう場合でも……。ただ外国の学会の場合楽器を持って行くのがたいへんですね。

中嶋 そうですね。ヴァイオリンは比較的手軽ですから、時々は持っていきますけれど、チェロだと持っていくのたいへんですね。

村上 そうですね。でもそういう機会にも、じゃあ、外国の方となさることもありませんか？

中嶋 そうですね、時々ね。先日は、モーツァルトの有名なクラリネット五重奏曲（イ短調・KV581）で第二ヴァイオリンをやりました。まさに音楽はその場で、パツとこういういろいろなものを通じあいますから。で、そういう意味では、私にとってヴァイオリンの演奏は、ま\*下手でもなんでもかなりいろいろの場面で人生の救済のための一つ糧になってます。

村上 そうすると、ご専攻が国際関係論でいらっしゃるわけですが、ご自身の国際関係にも潤滑油になっているんですね。そういう言い方をしちゃうと、よその国の人に悪いのかもしれないけどね。

中嶋 一つだけね、若干手前みそになりますけど、かつて文化大革命の時に、中国で紅衛兵たちがあの西洋の音楽なんか全部追放せよといっていた頃に中国に行きましたね。で、楽器は展示してあって外国人だけに見せてくれましたので、即興で私がヴァイオリンを弾いて、たまたま紅衛兵の中にピアノができる女の子がいましたね、毛沢東を讃える「東方紅」を上海で弾いたことがあるんです。

村上 ヘ……、そうですね。あつという間にたくさんの人だけができました。

村上 どういう場所ですか？

中嶋 上海の工業展覽会場の中です。そこに中国製のヴァイオリンが展示してあったんです。ですからね、それなんかそのままに政治のドラマの激動の渦中で、ヴァイオリンが弾けたおかげに大変印象深い日中交流になりました。紅衛兵のピアノ伴奏でヴァイオリンを弾いたなんてのは、世界広しと言えども私一人じゃないかと思<sup>い</sup>ましてね。

村上 は……。これは大変珍しいエピソードをお聞かせいただきました。そうですね。しかしその、私は無知をさらけ出しますが、文化大革命当時、ヴァイオリンは西洋の楽器ということで排斥されはしなかったんですか？



村上　そうですね。でも本当に中嶋さんにとっては、ヴァイオリンと音楽とは文字通り

生きていて、単なる一つの趣味ではなさそうですね。

中嶋　いえいえ。

本当にどうも。得難いご体験までお聞かせいただきまして、楽しゅうございました。今日はありがとうございました。

中嶋　どうもありがとうございました。

㇏

中嶋 山領 雄 (ちかじま・みねお) 一九三六年松本市

生まれ一九一五年一東大大学院(国際関係論)卒業。現在、東京外国語大学教授。社会学博士。

著書『はサントリー学芸会受賞の日 北京列強』

(筑摩書房)ほか 日 中ノ対立と現代 日 (中央公論社)

社 日 中国に呪縛される日本 日 (文芸春秋)

日 新冷戦の時代 日 (TBSブリタニカ)

たご多教